原発で 20 年間も現場監督として働いた平井憲夫さんの話

おかしいことをおかしいという会

こんにちは

わたしたちは
「おかしいことをおかしいという会」です。

福島第一原発事故で
いまも苦しんでいる福島県のみなさんが存在するときに
東海第二原発を再稼働しようとすることは
「おかしい―　」
と思います。

そのためには
原発は存在するだけで危険だ
ということを説明しなければなりません。

今日は、
二十年間、原子力発電所の現場で働いていた、平井憲夫さんの話しを紹介します。
平井憲夫さんは、岡山県倉敷市生まれです。
石油化学プラント建設会社に入社し、千代田化工建設、
日立製作所グループの吉田溶接工業、
東京電力福島第一、第二、中部電力浜岡、日本原電敦賀、日本原電東海など、
沸騰水型原発の建設、定期検査における配管工事の監督を 20 年以上原発で勤めました。
1988 年退社後、1990 年「原発被曝労働者救済センター」を設立、
代表として原発工事で被曝する労働者の救済にあたりながら、
全国で講演活動を繰り広げました。
各原発建設現場の実態を法廷で証言しました。
残念ながら 1997 年1月逝去しました。
58 歳の若さでした。
これから紹介する内容は逝去する約 1 年前の話です。

－－

私はプラント、大きな化学製造工場などの配管が専門です。
二十歳代の終わりごろに、日本に原発を造るというのでスカウトされて、

原発に行きました。
一作業者だったら、何十年いても分かりませんが、
現場監督として長く働きましたから、
原発の中のことはほとんど知っています。

そして、現場監督として働いていて、内部被曝を百回以上もして、
癌になってしまいました。
癌の宣告を受けたとき、本当に死ぬのが怖くて怖くてどうしようかと考えました。
でも、私の母が何時も言っていたのですが、「死ぬより大きいことはないよ」と。
じゃ死ぬ前になにかやろうと。
原発のことで、私が知っていることをすべて明るみに出そうと思ったのです。

原発は確かに電気を作っています。
しかし、私が二〇年間働いて、この目で見たり、この体で経験したことは、
原発は働く人を絶対に被曝させなければ動かないものだということです。
それに、原発を造るときから、
地域の人達は賛成だ、反対だと割れて、心をズタズタにされる。
出来たら出来たで、被曝させられ、何の罪もないのに差別されて苦しんでいるんです。

みなさんは、原発が事故を起こしたら怖いのは知っている。
だったら、事故さえ起こさなければいいのか。
平和利用なのかと。そうじゃないでしょう。
私のような話、働く人が被曝して死んでいったり、
地域の人が苦しんでいる限り、
原発は平和利用なんかではないんです。
それに、安全なことと安心だということは違うんです。
原発がある限り安心できないのですから。

それから、今は電気を作っているように見えても、
何万年も管理しなければならない核のゴミに、膨大な電気や石油がいるのです。
それは、今作っている以上のエネルギーになることは間違いないんですよ。
それに、その核のゴミや閉鎖した原発を管理するのは、私たちの子孫なのです。

そんな原発が、どうして平和利用だなんて言えますか。
だから、私は何度も言いますが、
原発は絶対に核の平和利用ではありません。

最後に、私自身が大変ショックを受けた話ですが、
北海道の泊原発の隣の共和町で、
教職員組合主催の講演をしていた時のお話をします。
どこへ行っても、必ずこのお話はしています。
あとの話は全部忘れてくださっても結構ですが、
この話だけはぜひ覚えておいてください。

その講演会は夜の集まりでしたが、
父母と教職員が半々くらいで、およそ三百人くらいの人が来ていました。
その中には中学生や高校生もいました。
原発は今の大人の問題ではない、
私たち子どもの問題だからと聞きに来ていたのです。

話が一通り終わったので、私が質問はありませんかというと、
中学二年の女の子が泣きながら手を挙げて、
こういうことを言いました。

「今夜この会場に集まっている大人たちは、
大ウソつきのええかっこしばっかりだ。
私はその顔を見に来たんだ。どんな顔をして来ているのかと。
今の大人たち、特にここにいる大人たちは農薬問題、ゴルフ場問題、原発問題、
何かと言えば子どもたちのためにと言って、
運動するふりばかりしている。
私は泊原発のすぐ近くの共和町に住んで、二四時間被曝している。
原子力発電所の周辺、イギリスのセラフィールドで白血病の子どもが生まれる確率が高いというのは、本を読んで知っている。
私も女の子です。年頃になったら結婚もするでしょう。
私、子ども生んでも大丈夫なんですか？」と、
泣きながら三百人の大人たちに聞いているのです。
でも、誰も答えてあげられない。

「原発がそんなに大変なものなら、
今頃でなくて、なぜ最初に造るときに一生懸命反対してくれなかったのか。
まして、ここに来ている大人たちは、二号機も造らせたじゃないのか。
たとえ電気がなくなってもいいから、私は原発はいやだ」と。

ちょうど、泊原発の二号機が試運転に入った時だったんです。

「何で、今になってこういう集会しているのか分からない。
私が大人で子どもがいたら、
命懸けで体を張ってでも原発を止めている」
と言う。

「二基目が出来て、今までの倍私は放射能を浴びている。
でも私は北海道から逃げない」
って、泣きながら訴えました。

私が「そういう悩みをお母さんや先生に話したことがあるの」と聞きましたら、
「この会場には先生やお母さんも来ている、でも、話したことはない」と言います。
「女の子同志ではいつもその話をしている。結婚もできない、子どもも産めない」
って。

担任の先生たちも、
今の生徒たちがそういう悩みを抱えていることを少しも知らなかったそうです。

これは決して、原子力防災の八キロとか十キロの問題ではない、
五十キロ、一〇〇キロ圏でそういうことがいっぱい起きているのです。
そういう悩みを
今の中学生、高校生が持っていることを絶えず知っていてほしいのです。

－－

原発は人類とは共存できないものであり、わたしたちはそれを許すことができません。

立ち上がりましょう。
東海第二原発再稼働反対をいっしょに訴えましょう。

おかしいことをおかしいという会　でした。
おさわがせしました。（2016 年 4 月 23 日）

事務局　小林　正典（代表、茨城大学名誉教授、工学博士）〒317-0066　高鈴町 5-21-3
E メール　masanori.kobayashi.kuutenki@vc.ibaraki.ac.jp）　電話　0294-24-4176